

## 与え、与えられることの喜びを

梶原 隆之(地域連携センターBICS副センター長)

私が大学1年生のある日、社会福祉概論の講義の終わりに、先生が「少年自然の家でボランティアをしたい人は授業が終わったら来て下さい」と言いました。夏休みに10日間も泊り込みで、子どもたちと遊ぶのも何かおもしろそうだ、旅行気分仲間と申し込んだのです。夏休みが始まると、4人組が1週間交代で行くことになりました。最初のチームの友人が帰ってきて「ただごとでは無いきつい作業だ。覚悟して行ったほうが良い。子どもは居ない。」と、へとへと顔をしてつぶやきました。私の番になり、行って見てその通りでした。薪の切り出しや、地面の整備、池を作るからと、1メートルもある石を、4、5人でどかしたりなど、1日中、全力での肉体労働の日々でした。夜は4人で語り合い、インスタントコーヒーの粉を溶かして作ったアイスコーヒーを飲みながら(唯一のご馳走でした)、なんとか日々を過ごしました。しかし、運良く、後半には、子どもたちの利用者が宿泊にやってくる、キャンプファイヤーなどの活動の手伝いをする事になりました。私たちが切り出した薪は、ファイヤーのレクリエーションや食事の時に活躍し、石をどかした後の穴は、マスつかみの池になったのです。「子どもたちが私たちの準備で喜んでくれている」と、とても感動したのを覚えています。これをきっかけに、子どもたちのキャンプや、不登校生徒のグループワークなどに関るようになりました。



また、アメリカのオハイオ州にボランティア交流事業に行った際、「ボランティアは人生に影響を与えるものだ」と、教えてもらったことがあります。私がここでこうしているのも、まさに、その言葉の通りです。「この喜びを学生に伝えたい」と、ずっと考えていました。そんな折、BICSの運営委員という役割をいただき、主に、まるびいの森(子どもたちの遊びの場の提供)に関らせていただき、大変、光栄に思い、感謝しています。私は、学生たちには厳しいことも言いますが、彼らは、歯を食いしばって努力したときの、子どもたちの笑顔や喜びが、なんとも、うれしいことに気づいてくれたようです。思いは、伝わりつつあります。

一方的に奉仕活動をさせると、やらされた感覚で終わってしまう恐れがあります。BICSでは、地域貢献を教育活動に結びつける「サービラーニング(地域貢献学習)」を応用し、独自の「BICSラーニング」と名づけた教育課程を展開しています。それに基づき、「バウムクーヘン(高齢者支援)」「ピース☆(障害者支援)」「まなびの教室(日本語を母語としない子どもの学習支援)」等の各事業を展開するべく努力しているところです。来年度は、サービラーニングの教育評価システムの開発の研究に取り組んでいく予定であります。

開所3年目をもうすぐ迎え、ホップ、ステップ、そして、ジャンプの年となろうとしています。どの事業の学生たちも、ウキウキ、ワクワクしながらミーティングに臨み、活動の喜びをつかんでいる様子です。サービス事業の他に、ボランティア紹介事業も軌道にのってきました。

「与え、与えられる喜びを、学生に伝えたい」と、思っていたつもりでしたが、どうも、私自身が、学生から喜びを与えられているようです。

## 「つどいの広場 まるびいの森」

白鳥 友里恵(つどいの広場まるびいの森リーダー)

まるびいの森は、昨年から公民館と共催という形で月に一度地域の小学生を大学に招きゲームや工作をとおして異世代間交流を図る第一歩を踏み出しました。失敗も多い年でしたが充実した年だったと思います。はじめは、学生達もどのように進めていったらいいのかと試行錯誤の繰り返しでしたが、ようやく世界中の子どもたちがという歌を全員で歌いみんなで集まってから「まるびいのうた」に合わせて旗あげし、ゲームをしてから工作という形式もでき、企画や運営の仕方にも少しずつ慣れてきました。あやめ祭にも、写真だてづくり、ウォークラリー、みんなで準備した緑日の3部構成で参加し外部の方にも知っていただく良い機会となりました。2月にはもちつき大会を実施し、地域の方々との交流の場にもなり学生実行委員やボランティアの学生も楽しみました。

今後まるびいの森は、異世代間交流を図ることを目的としつつ来年度も公民館と共催という形で活動していきたいと思っています。また、子どもたちにもまるびいの森を通してたくさんの人との出会うや経験できる場にしていけたらと思っています。来年度は、地域の方々の協力を得てさらに交流を図る場を増やしていきながら、他の事業と合同で行事を企画したりなどしていけたらと考えています。企画はとても大変ですが、この一年で学生一人ひとりも成長するよい機会となり、当日子どもたちの笑顔や楽しかったという声を聞くことで、遊びを通し私たちも学ぶことができ大きく成長できる場だと実感しています。

## 「日本語指導法講座から支援スタートへ —まなびの教室から学んだこと—

筒井 香織(学びの教室 メンバー)

新入生が加わり、実際に子どもと接したいという気持ちは大きくあるものの、教えるとは？実際はどのように教えるの？などと全く知識がなかったため、夏休みを利用して日本語の先生をお招きし、「日本語指導法講座」という勉強会を行いました。

講座では、支援が必要な学習者の現状を知ることから始まり、相手の学習目的に基づいてコースデザインをして準備から終わりまでを具体的に計画するという、教材について、自分の日本語力をチェック、実際に数字表の教材を作成する、と様々な内容を学ぶ事が出来ました。その中では教材を必要とするとき、すぐに購入することを考えるのではなく、自分でわかりやすくオリジナルのものを作ったり、広告の切り抜きを使ったりと教えるためにはいろいろと工夫も必要であることと、日常の中に教材となるものはいっぱいあるということに気づきました。

そして、実際に一年生の学生も後期から小学校への支援をスタートすることができました。しかし、短い授業時間の中では、教えることに必死になってしまい、支援をすこし難しく感じてしまうことがありました。まずは、時間をかけてでもコミュニケーションをとり講座で学んだ相手を知ることが必要であると、実際の支援を通して改めて気づきました。今後は、もっと外国人の子どもと接してみることも大切なのかなと思います。この経験を生かして、来年は成長できるように努めていきたいと考えています。

## 「バウムクーヘン」

岩間 美穂(バウムクーヘンリーダー)

今バウムクーヘンでは、3月29日(木)の13時~15時に行う「お花見会」に向けて準備を進めています。地域の方から「大学に咲く桜がとても綺麗だから、ぜひ大学内に入って見てみたい」という要望があったため、またバウムクーヘンで新しく地域の高齢者を大学に呼んでイベントを行いたいと考えていたため、第1回目として「お花見会」を行うこととなりました。ふじみ野市在住の65歳以上の高齢者を対象として、大学の桜をみたり、お茶を飲んだりお菓子を食べたり交流会のようなイベントにしようと思っています。また、地域の方々、大学内サークルの方々にご協力いただいて、太鼓や琴、日本舞踊の発表なども企画しています。参加したいと言って下さっている高齢者の方が多いようで、大きなイベントとなりそうです。大学内に高齢者を呼んでイベントを行うことは初の試みなので、次に繋がる良い活動にしたいと思っています。そして、たくさんの地域の方が参加して下さるので、学生にもボランティアとして参加してくれる方を募集して、世代間交流を行える場を提供し、このバウムクーヘンの活動が地域の方と学生との心をつなぐ架け橋となるよう頑張りたいと思います。

バウムクーヘンでは、今後の活動として、お花見会やあやめ祭への参加など年に1・2回行う大きいイベントのほかに、毎月又は数ヶ月に1度にお茶会やお話会などの高齢者を対象とした活動を行っていかうと計画しています。定期的に行うことで、高齢者も気軽に大学へ足を運べるように、また大学で学生と触れ合えることを1つの生きがいとして高齢者が地域で生活していけるよう、今後の活動を考えていきたいと思っています。

## 「ピース☆」

諏佐 あゆみ(ピース☆リーダー)

ピース☆では、自閉症児グループの「みかん」と継続して活動していくことになり、2月4日に初企画を行いました。内容は事前に行ったニーズ調査と私たちにできることを照らし合わせ、調理活動により親睦を深めていこうということでホットケーキ作りを実施しました。また、保護者の方々から「大学は子どもたちにとって初めての場所なので学校探検をしてみるのもいいのでは」とアドバイスをいただき、大学内スタンプラリーを行いました。

初めての活動であることと、初めて自閉症の子と接するということでメンバー全員が緊張して積極的に接することができなかったことや準備が行き届かなかったこと、そして一人一人の役割がはっきりしていなかったことなどの反省から次回への課題ができました。

しかし何よりよかったことは子どもたちが楽しかったと言ってくれたことです。

保護者の方々や先生の手助けもあり無事に企画を終えることができ、たくさん挙げた反省を次の企画や活動に活かしていきたいです。

## 「卒業生から後輩に向けて」

私は、大学生活において学生実行委員を努め自分の想像した以上に充実した日々を過ごすことが出来ました。

学生が主体となって、地域の子供から高齢者の方までそのニーズに合わせた活動の企画・運営や自分が大学で学んだことを実際に活かすことで、普段の大学の授業では感じ取れない現場の生の空気を知ることができました。また、自分自身が地域の方の力となれることの喜び、充実感、思いやりの大切さを感じ地域と学生の双方の連携により、より良い活動が実現できるのだということを実感しました。

就職活動においても、私達の行ってきたボランティア活動等やそこで得た経験について堂々と話すことができた、ということも自分にとって大きな自信に繋がったと思います。

ぜひ後輩達にこの活動を今後も精力的に行ってってもらいたいと思います。

これからはOGとして活動を影ながら見守っていきたいと思っています。 (佐瀬 亜耶子)

私がBICSに入って最もよかったことは、新しい事業の立ち上げに関われたことです。新しく4つの事業を立ち上げようというときに『つどいの広場(現在のまるびいの森)』の担当学生が自分以外後輩だけという体制にすごく不安とプレッシャーを感じていたことを今でも覚えています。その後輩達と先生方、地域の方に協力をしてもらい、涙を流すこともありましたが事業を開催できたときには本当に達成感でいっぱいでした。苦勞と達成感を一緒に味わった後輩のみんなには本当に感謝の気持ちで一杯です。 (猪野塚 容子)

BICSの活動を通じて、沢山の地域の方の「声」を聞くことが出来ました。そしてボランティアを企画する事の楽しさ・難しさを知り、ボランティアに対する考え方が変わりました。BICS学生実行委員としてBICSの活動に参加し、自分が大きく成長できたと感じています。BICSの活動が、学生実行委員だけでなく、学生実行委員が企画したボランティアに参加する人等の多くの学生によって、良いものになっていって欲しいと思っています。 (清水 祐子)

BICSの活動では、地域の方々と関わりをもつことや、企画や運営に携わることが出来たこと等とても良い経験になりました。この経験を今後に生かしていきたいと思います。

そして、活動の際、指導、助言をくださった先生方や地域の方、先輩方に感謝しています。ありがとうございました。後輩の皆さんこれからもBICSの活動を今以上に発展させていってください。応援しています。

(斎藤 由佳梨)

## 「卒業生から後輩に向けて」

私がBICSの活動に携わりたいと思ったのは、地域と連携して活動をしていくという所に魅力を感じたからです。人材育成の担当をしていましたので、学生や地域の方々と触れ合う機会が多く、また、地域の方々の中には、在日外国人の方もいらしたのでとても勉強になりました。私達は、まだBICSの基礎作りの段階だったような気がします。引退して、後輩達が様々は事業でそれぞれの活動を発展させている姿をみて嬉しく思います。後輩の皆さん、BICSの活動を通して沢山のことを学べると思います。大変なこともあると思いますが、今後も頑張ってください。

(白石 恵子)

私は、主に16・17年度のホームヘルパー講座に携わらせていただきました。学生、先生、地域の方々と知識や情報を交換し、さまざまなつながりができ暖かい雰囲気の中、講座が行われていたことが印象的でした。事業の進行役となり学ぶこと、事業の参加者となり学ぶこと等、様々な視点から参加することができました。卒業後も地域のニーズに合わせ各事業の発展や報告を楽しみにしています。

(清水 弥生)

2006年度卒業の学生実行委員



## 地域連携センターを通じて大きく成長する学生

沼田 伊久俊(地域連携センターBICS地域委員)

今、子どもの社会化が遅れている。大きな要因として考えられるのは、子どもが社会の要員になっていないことではないかと思う。子ども達の日常の姿を見てみると、小学生時代は地域のスポーツクラブや青少年組織に入って、親以外との大人の接点が確保されている。ところが、思春期前期から大人へ成長する重要な中学生・高校生時代の子ども達は、部活などを含めた学校社会に丸抱えになっていることである。親の方の意識もいささか勝手に、部活をやっているだけで非行化に結びつかないと高をくくっているし、問題が表面に現れなければ、部活がいじめの温床であることにも目を瞑っている。



子ども達は社会との接点がないまま、限られた世界しか体験しない。「子と親」・「子と教員」・「子と子」・「子と塾の先生」必然的に同属的な人間との付き合いの中で多様性が失われ、言葉で伝えるスキルさえも失っている。まして、子どものときから「知らない人間とは口をきいてはいけません」という親との約束は、人を見る目さえも失ってしまっているのがこの頃の子ども達といえる。そして、そんな失われたものを取り返す場所が大学というモラトリアム期間なのかも知れない。これらの背景が、現代の人々の精神的なストレスによる鬱的状态を作り上げているともいえる。

私の勤務している公民館という職場は、多様な人間との接点をコーディネートする場所であり、そこには、認知症の老人も入館するし、ホームレスのおじさんも入館する。この人たちとの接し方を見ると高齢者のグループは許容力が高く、若いほどそして体力的に優れているグループや個人は許容力が低いように見えてならない。

大学と家や下宿との往復しかしていない学生や、マニュアル通りの対応しか人との接点のないバイトをしている学生などには、本物の社会性が育ち得ない。BICSの学生委員として多様な他人との接点を、マニュアルでなく自分の言葉と行動で対応している学生との間には、4年の間に社会人としての大きな差が生じるに違いないと考えている。

BICSが出来る以前に、公民館に文京学院の学生ボランティアが事業協力に来ていただいたことがあるが、それぞれに魅力的に成長して社会で活動していることを思うと、BICSが文京の学生の自己成長の場になっていくことを望んでいるのは私だけではないと確信する。

## 障害者が地域で暮らし続けるための市民活動の歩み 上福岡障害者支援センター21

有山 博(地域連携センターBICS地域委員)



1976年に旧上福岡市で、収容施設中心の福祉に対して「障害者も共に生きる地域を作ろう」を合言葉にした、障害児・者、その家族、支援者(その頃、まだボランティアという言葉は使われなかった)の団体「とんぼの会」が発足した。そしてその10年目、1985年に「とんぼ塾の充実・拡大、青年障害者の通所できる施設やお店の実現、障害者の小規模生活寮建設」といった目標をかかげた10年後ビジョンを作成し、実現に向けて歩き出した。

まず1987年秋、センター21の前身団体「上福岡障害者自立生活センター21」を立ち上げ、とんぼの家にて通所の日中活動を開始した。牛乳パックのリサイクル紙や廃品回収、フリーマーケット開催などをしながら、見学、学習を重ね、まずは店や工房といった働く場を設置すること、そうしたことに行政の援助を得ることを目指した。以下その後の事業の展開を時間を追って紹介すると。

1. 自然食品と福祉作業所製品の店「まめの木」。1990年、現在上福岡駅西口にあるココネ上福岡のビルが建つ辺りにあった商店街の中に、障害者が働く店としてオープン。2002年、上福岡駅西口再開発のために立ち退きとなり、「協働舎レタス」(後述)内に移転して、独立の店としては消滅。
2. くまのペイカーズ(心身障害者地域デイケア事業)。川越市民の仲間がふえてきて、川越市の援助が受けられる見込みだったので1996年秋、川越市熊野町に定員10人のクッキー・パン作りの工房を設置した。自主生産、出張販売をしてきたが、2006年秋、有限会社PGSJ(プルデンシャル生命保険の障害者雇用特例子会社)と提携して、クッキー作りの請負作業中心の仕事に変更。作業場も移転した。  
〈〒350-1147川越市諏訪町123-4グレイスメイビル。電話049-248-4780〉
3. みどり荘(生活ホーム事業)。1996年、上福岡市に承認を受け開所。アパートを1軒借り受け、5人の障害者が住む。世話人は常勤1名と非常勤1名。世話人の泊まりはなし。  
〈〒356-0005ふじみ野市西2-5-9、電話049-264-0141〉
4. ケアシステム二人三脚(1998年)からNPO障害者自立生活センター二人三脚(2002年)へ。自立生活をすすめる障害者のための介助者派遣事業をレタスの活動の一つとして始めた。支援費制度に対応するためNPOに改組し、組織上は別組織にし、センター21と足並みをそろえて活動している。障害者自立生活プログラムと介護者派遣事業を行う。  
〈〒356-0004ふじみ野市上福岡4-6-11イシデンビル。電話049-264-0990〉
5. 協働舎レタス(心身障害者地域デイケア事業)。1997年、上福岡市の設置承認を受け開所。定員19人。自然食品他のショップ、調理場を併設。通所している人たちの障害の種類や程度、年齢が様々で、ポストイング、菓子・パン作り、出張販売、公園清掃、牛乳配送、アルミ缶回収、店番などの作業を行っている。就職を目指して外部実習している人もいる。  
〈356-0004ふじみ野市上福岡4-6-11イシデンビル。電話049-264-5497。049-261-4495(店)〉
6. ひまわり(生活ホーム事業)2003年、知的障害の人たちのために一軒家に5人が住む家族型生活ホームを開設した。世話人常勤1名と非常勤1名。日替わりの宿直スタッフを入れている点がみどり荘と違っている。入居者に対して川越市から家賃補助あり。  
〈〒350-1142川越市藤間1242-00。電話049-247-4303〉

## ◆登録団体のご紹介

今年度7月から始めた団体登録は、実質9月の後期から動き始め、2月28日現在以下にご紹介致します通り、ボランティア活動募集団体としてBICSに登録している団体が8団体あります。地域の団体や地域住民の方々にも少しずつ団体登録制度について浸透し始め、問い合わせも徐々にではありますが増えてきています。また、登録団体からは、登録後様々なボランティア募集があり、学内の活動団体との調整後、数多くの学生が登録団体の活動にボランティアとして参加しています。

来年度は、さらに多くの活動募集団体と学内ボランティア団体にBICSに登録をしていただけるよう積極的に働きかけ、地域で活動されている団体のニーズに少しでも応え、ボランティア活動を通して多くの学生が学習しながら社会貢献出来る機会を提供出来ればと考えています。地域の団体でボランティアのニーズがある団体や、学内活動団体(クラブ、ゼミ等)でボランティア活動を行いたいと考えている団体は、ぜひ一度詳細について事務局にお問い合わせ下さい。

[ボランティア活動募集登録団体]

	名 称
1	NPO法人 なかよしねっと
2	東京都立高島養護学校PTA
3	板橋区手をつなぐ親の会学齢部おれんじ
4	富士見市教育委員会 富士見市教育相談研究室内 適応指導教室「あすなろ」
5	谷津幼稚園
6	富士見市子育て支援課 かたつむり教室
7	介護老人保健施設 むさしの苑
8	ともにあゆむ会

## ◆事務局から

今年度もあっという間に過ぎていきました。今年度は学生実行委員として活動する学生が増え、BICSルームで活気のあるミーティングが繰り返されている様子を多く見ってきました。年度始めの様子から比べると格段に成長しており、そんな姿を間近で感じられることを嬉しく思います。

また昨年度に比べて、地域の方が本センターに訪れる回数も増えました。徐々に地域に開くセンターとして機能してきているように感じます。

来年度も、一生懸命活動する学生へ出来る限りのサポートをするとともに、1人でも多くの学生、そして地域の方と接することが出来るような活動を行い、またボランティアコーディネートの専門性を高めるべく、頑張っていきたいと思っております。今後ともよろしく申し上げます。

## ■編集後記■

BICS通信第2号を関係者のご協力により予定通り発行する事が出来ました。各事業とも地域委員や地域の方々のご協力で充実した活動を展開しています。そのような活動を1年間BICSで実践してきた学生実行委員の成長には目を見張るものがあります。学生生活におけるBICS活動を通しての貴重な体験を将来何らかの形で活かしてもらえればと思います。

(長谷川)

発行日 2007年3月7日

発行 文京学院大学地域連携センター  
〒356-8533

埼玉県ふじみ野市亀久保1196

TEL: 049-261-7944 / FAX: 049-269-6817

E-mail: info\_bics@liberty.u-bunkyo.ac.jp